

准看護師のキャリアと仕事及びケアに関する認識

—福祉・医療現場で働く准看護師への調査を通して—

田中 眞希¹・宮上多加子²

(2016年9月23日受付, 2016年12月14日受理)

Perceptions of careers, jobs, and nursing care: From a survey of nursing assistants working in social care and medical care settings

(Received : September 23, 2016, Accepted : December 14, 2016)

Maki TANAKA¹, Takako MIYAUE²

要 旨

本研究は、福祉・医療現場で働く准看護師の看護に対する意識と医療職の立場からみたケアに関する認識について明らかにすることを目的としている。対象者12人に対して個別面接調査を実施し、データを質的帰納的に分析した。得られたコードは83、コードをまとめて生成したカテゴリーは18であった。

分析の結果、福祉・医療現場で働く准看護師は、学校で学んだ看護の知識だけでなく、社会人経験や人生経験を自分の仕事に活用していることが分かった。また、業務において、准看護師と看護師に区別はないと認識しており、知識不足や責任の重さを感じていた。

キャリアについて、医療現場の准看護師は、現場経験を積み看護師資格取得を目指していた。一方、福祉現場の准看護師は、看護職として必要な知識を得ることに意欲を示していたが、看護師資格取得への志向は低かった。

キーワード：准看護師, キャリア, 福祉・医療現場, ケア,

Abstract

The objective of this study was to understand how assistant nurses working in social welfare and clinical settings perceive the nursing profession, and to get their views on nursing care from a professional standpoint. Data collected through individual interviews of 12 participants were analyzed using qualitative inductive analysis. A total of 83 codes were identified and grouped into 18 categories.

The analysis showed that assistant nurses working in social welfare and clinical settings not only utilized nursing knowledge learned in school, but also applied prior work- and life-related experiences in their jobs. In terms of work duties, they were aware that there was no distinction of duties between assistant nurses and registered nurses, and hence felt they lacked knowledge and were weighed down by the responsibilities.

As for career aspirations, assistant nurses in the clinical setting were aiming to obtain their registered nurse licenses by accumulating work experience in the field. On the other hand, assistant nurses working in the social welfare setting were eager to gain knowledge required in the nursing profession; however, they were less interested in getting their registered nurse licenses.

Key words: assistant nurse, career, working in social welfare and clinical, care

-
- 1 高知県立大学社会福祉学部 助教 修士 (社会福祉学)
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Assistant professor (Master of Social Welfare)
 - 2 高知県立大学社会福祉学部 教授 博士 (社会福祉学)
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, professor (Ph.D.)

I 研究の背景

わが国の高齢化率が25%を超え、今後も高齢者人口は増加し、要介護高齢者も増加することが予測されている。そのため、2025年には248万人の介護人材が必要と推計されている。一方で、高齢者を支える生産年齢人口は減少しており、増加する要介護高齢者を支える福祉・医療現場の人材確保は困難な課題となっている。そのため、人材のすそ野の拡大を進め、多様な人材の参入を検討し、福祉・医療現場の人材を確保すべく、地域の関係主体が連携し地域の実情に応じて総合的・計画的に進められている（厚生労働省 2015）。

福祉・医療現場の人材の量的状況について、介護保険制度施行以降サービス量の増加に伴い介護従事者は増加しており、2004年は約1,002,000人であったが2013年には約1,765,000人となり、9年間で約1.76倍に増加した（厚生労働省 2014a）。

日本看護協会（日本看護協会出版会 2016）によると、看護職（看護師および准看護師）も就業者数が年々増加し、2005年に1,234,598人であったが2014年には1,506,380人になり、9年間で約1.22倍に増加した。看護師・准看護師を別に見てみると、看護師は2005年に822,913人、2014年には1,142,319人であり、9年間で約1.39倍に増加した。一方、准看護師は2005年に411,685人、2014年には364,061人であり、看護職（看護師および准看護師）数が増加しているにもかかわらず9年間で11.6%の47,624人が減少している。

准看護師が減少した背景として、准看護師制度に関する課題が影響していると考えられる。量的確保を目的としてつくられた准看護師であったが、看護職の資格を看護師に一本化し資質向上を目指すという考えが日本看護協会によって示され、教育が十分でない准看護師が同じ業務を行うことの危険性を指摘するなど、さまざまな働きかけが行われてきた（野村 2014）。1994年以降、看護に関する政策課題の検討が集中して行われ、当時の厚生省（1996）は「21世紀の早い段階を目前

に、看護婦養成制度の統合に努める」との見解を出している。また、筆者らの調査（田中・宮上 2015、宮上・田中 2016）においても、准看護師を目指して准看護学校へ入学した学生が、卒業後進学し看護師資格を取得する人が多いこと、准看護学校卒業後就職する場合も将来の看護師資格取得の道を探っていることが明らかになった。

現在も看護師及び准看護師の両資格は存在し、野村（2014）がいう「准看護師問題」は解決していないが、2004年度から通信制による教育が開始され、准看護師が働きながら看護師を目指すことができるようになった。通信制への入学対象者は、准看護師として10年以上の就業経験を有する者としていたが、2018年4月1日より現行の10年から7年に短縮された（厚生労働省 2016）。また、日本看護協会では2009年度から通信制進学者に対して、奨学金制度にて学習支援を行っている（日本看護協会 2016）。このような状況から、多くの准看護師は看護師資格を取得し看護師となったと考えられる。

前述のように准看護師は減少しているが、准看護学校の平均定員充足率及び定員に対する応募者数である倍率の平均は、2008年度は95.7%（1.7倍）、2011年度は92.8%（3.0倍）、2013年度は100.8%（2.8倍）、2015年度は90.4%（2.2倍）であった（公益社団法人日本医師会 2008, 2011, 2013, 2015）。一方、介護福祉士養成校の定員充足率は2008年度45.8%、2009年度以降は離職者訓練等活用による入学者が加わり55.1%、2011年度は69.3%、2013年度は69.4%であった（厚生労働省 2015b）。2008年度に定員充足率50%を切ったが、離職者訓練等の活用により社会人学生が入学し、2010～2013年度は70%前後を推移している。その後のデータはないが、募集停止や定員削減を決める養成校があるなど、改善の兆しは見えない。

看護職（看護師および准看護師）の就業場所について、日本看護協会の実態調査（日本看護協会出版会編集 2016）によると、2014年の看護師の

就業先として一番多いのは病院で70.1%，次いで診療所15.9%，訪問看護ステーション3.2%，居宅サービス等2.4%，介護老人保健施設2.0%，介護老人福祉施設1.8%であった。それに対し、准看護師の就業先として一番多いのは病院で40.7%，次いで診療所35.7%，居宅サービス等7.3%，介護老人保健施設6.2%，介護老人福祉施設4.9%，社会福祉施設2.7%，訪問看護ステーション1.0%であった。これらのことから、准看護師は看護師と比較し、病院の割合が低く、診療所、居宅サービス等、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、社会福祉施設で働く者の割合が高いことが分かる。准看護師の就業場所は看護師と比較し、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、社会福祉施設の割合が高く、それらの就業場所は介護福祉士等の介護職が多く働く場所でもある。

II 准看護師に関する先行研究の動向

看護職に関する研究動向について、国立情報学研究所の論文検索データベースであるCiNiiを用いて、過去10年間の論文のうち、「看護師」をキーワードとして検索したところヒット数は15,777件であった(2016.9.14検索)。これに対して、「准看護師」をキーワードとして検索したところヒット数は58件であった。そのうち、准看護師のみを対象とした論文数は13件であった。さらに、准看護師のうち学生を対象としている3件(宮上・田中2016, 田中・宮上2015, 河野2014)を除くと10件であった。

1994年以降の准看護師問題の政策過程を分析した論文が1件(野村2014)、准看護師の能力などを含む准看護師の現状と課題に関する論文が3件(渡瀬ら2014, 松永2012, 白井2009)、看護師との連携等に関する准看護学生の認識について明らかにした論文が1件(山崎2012)、准看護師として働きながら通信課程で学ぶ者を対象とした論文が3件(逢坂2008, 中島ら2008, 狩谷ら2008)であった。また、准看護師のキャリアに関する論文が2件(高橋2010, 安田ら2009)あったが、

病院に勤務する准看護師の看護師資格取得に向けた意識調査が中心となっており、准看護師の仕事やケアに関する認識について明らかにしたものはほとんど見られない。特に、福祉現場で働く准看護師を調査対象にした研究は見当たらなかった。

筆者らは、前述した離職者訓練等を活用し介護福祉士養成校で学ぶ社会人学生に対して聞き取り調査を行い、社会人学生のキャリアと仕事に関する認識について明らかにしてきた(宮上・河内2012, 宮上2012, 宮上・田中2013, 宮上・田中2014)。それらの研究で、社会人学生は介護の理念や技術を学ぶことには抵抗感が少なく、学習や実習の中で自身の持つ社会経験や資質を活用しようとしていたことが明らかになった。

その後、介護福祉士と同様にケアを必要とする人に対して直接的な対人援助を行うことを職務とし、養成期間が同じである准看護師を対象とし、准看護学校で学ぶ社会人学生に聞き取り調査を行った(田中・宮上2015, 宮上・田中2016)。その結果、看護の仕事についての信念を固めつつ、将来のキャリアを描こうとしていることが明らかになった。

それらを踏まえ、福祉・医療現場で働く准看護師に対して調査を行い、看護に対する意識と医療職の立場からみたケアに関する認識について明らかにすることとした。

III 研究方法・目的

1. 研究の目的

研究目的は、福祉・医療現場で働く准看護師の看護に対する意識とケアに関する認識について明らかにすることである。本研究では、介護福祉士と同様に対人援助を行い、また職場においても、介護職と連携・協働する准看護師が、看護の仕事に対してどのように思っているのかを、准看護師の立場から質的記述的な分析手法を用いて明らかにする。

2. 研究方法

本研究は、准看護師の立場から検討することを目的としていること、またこの研究テーマに関する先行研究が少なく、適切な理論や仮説が提示されていないことから、質的帰納的アプローチを用いた。具体的には、研究参加の同意を得られた対象者にインタビューガイドを用いた半構造化インタビューを個別面接にて実施し、得られた内容から逐語録を作成し、質的分析ソフトMAXqdaを用いてコード化を行った。さらに、語られた内容と比較検討しながら、抽象化作業を進め、コードからカテゴリーを生成した。調査内容は、准看護学校での学習を経て感じたことや変化したこと、医療職としての意識と介護福祉職に対する考え、看護に対する認識や仕事で大事にしたいと考えていること、看護の仕事の適正や看護の専門性などについてである。

質的調査方法におけるデータの厳密性を高め、分析結果をより確かなものにするために、確実性 (credibility) を高めるための協力者への再確認 (メンバーチェック) を行った。具体的にはカテゴリーを生成した時点で、調査対象者全員に対して結果を文書にて報告し、自身の経験に照らし合わせて納得できるかどうかについて参考意見を聴取し、分析結果は支持された。

3. 対象者の選定と倫理的配慮

福祉・医療現場の看護師長等の責任者に、本研究の目的・調査内容を説明し、調査実施の内諾を得た上で、調査対象者の条件を提示し、調査候補者の選定を依頼した。調査候補者に対して、研究者から研究内容と倫理的配慮についての説明を文書及び口頭で行い、協力の意思を確認した上で研究参加への同意書に署名を依頼し承諾を得た。なお、調査開始前には、本学の社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会に申請し承認を得ている (第384号：2014年6月24日付)。

IV 結果

1. 調査実施期間

2015年11月20日～2016年2月29日

2. 調査対象者の属性

調査対象者は12人で、男性1人、女性11人であった。調査時点の年齢別では、20歳代2人、30歳代4人、40歳代3人、50歳代3人であった。また、性別では男性1人、女性11人であった (表1)。面接時間は42～87分で、平均約54分であった。所属先の経験年数は5ヶ月～10年、平均4.3年、現在の所属先での経験以外も含めた看護職経験年数は5ヶ月～30年で、平均11.2年であった。看護職以外の経験がある対象者が多く、看護助手や介護職、サラリーマンや事務などさまざまであった。

対象者の所属先として、病院、障害者支援施設、介護老人保健施設、クリニック、介護老人福祉施設があった。病院とクリニックは医師、看護師等の医療関係者が多く働く現場であり、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、障害者支援施設については、介護職員が多く働く現場である。そのため、対象者の所属先として、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、障害者支援施設を福祉現場とし、病院とクリニックを医療現場として分析を行った。

3. カテゴリーとコード

准看護師のデータから生成されたコードは83、カテゴリーは18であった。カテゴリーとコードから読み取れる特徴として5つの局面に分類した (表2)。以下の文中では、局面を【 】, カテゴリーを『 】, コードを〈 〉の記号を用いて表記する。

4. 局面ごとのカテゴリーとコードの関係

(1) 【看護の道を選択し学ぶ】 (表3)

この局面には『①看護職を目指したきっかけ』『②准看護学校での学びと精神的支え』の2つの

表1 調査対象者

	性別	年齢	所属先・所属先経験年数・看護職経験年数			看護職以外の仕事の経験	面接時間
			所属先	所属先経験年数	看護職経験年数		
A	女性	28	病院 (精神科)	2年	8年	有：看護助手	56分
B	男性	43	障害者支援施設	8年	15年	有：サラリーマン, 左官など	60分
C	女性	26	病院	5ヶ月	8ヶ月	有：看護助手	53分
D	女性	50	介護老人保健施設	5年	5年	有：飲食店, 事務, 看護助手など	42分
E	女性	31	クリニック	4年	4年	有：介護職, 看護助手	48分
F	女性	30	障害者支援施設	3年	5年	有：看護助手	48分
G	女性	47	介護老人福祉施設	1年	10年	有：公務員, サービス業など	42分
H	女性	31	病院 (精神科, 認知症)	7年	7年	有：接客業, 看護助手など	43分
I	女性	33	病院 (精神科, 認知症)	9ヶ月	9ヶ月	有：一般企業, 看護助手	44分
J	女性	50	障害者支援施設	8年	29年	なし	87分
K	女性	48	障害者支援施設	2年	20年	有：サービス業など	61分
L	女性	58	介護老人福祉施設	10年	30年	有：サービス業など	60分

表2 准看護師のキャリアと仕事及びケアに関する局面とカテゴリー

局面	カテゴリー
I 看護の道を選択し学ぶ	①看護職を目指したきっかけ
	②准看護学校での学びと精神的支え
II 職場環境に沿った働き方をする	③あえて医療現場ではなく福祉施設を選択
	④同僚と支えあい働きやすい職場環境
	⑤介護職の専門性を認めるも微妙な関係
	⑥医療現場の多忙さと効率性優先への抵抗感
	⑦職場におけるメンタルケアの必要性
III 看護の仕事に必要な能力を考える	⑧命を預けられている看護の仕事の責任
	⑨知識不足や責任の重さを感じる
	⑩福祉施設の看護職は高い判断能力が求められる
IV 看護の仕事に向かう姿勢とやりがい	⑪社会人経験や人生経験を看護に活かす
	⑫利用者・患者主体のケアを意識
	⑬仕事のやりがいや満足感
	⑭福祉施設で働くことはメリットがある
	⑮福祉施設での看護職の立場を意識
V 看護職としてのキャリア	⑯働きながら必要な知識を学ぶことは基本
	⑰看護職は経験をつむことが重要
	⑱看護師資格のことは念頭にある

カテゴリーと8つのコードが含まれている。

看護職以外の仕事をした後に准看護学校へ入学するという選択をした理由としては、〈経済面を考え働きながら学べる准看護学校へ入った〉〈安定した職業である看護職を目指す〉のように、収入増加や自立の手段という経済的な側面が多かった。また、介護等の経験者からは〈介護は医療行為ができないので看護職を目指した〉との思いもあった。

〈周囲の人に支えられ准看護学校時代を過ごした〉のように、学友や教員、家族に支えられ、資格を取得したとの思いを持っている人が多くいた。働きながら学ぶことは大変であるが、それなりの覚悟を持って臨んでいた様子が伺えた。

(2) 【職場環境に沿った働き方をする】(表4)

この局面には『③あえて医療現場ではなく福祉施設を選択』『④同僚と支えあい働きやすい職場環境』『⑤介護職の専門性を認めるも微妙な関係』『⑥医療現場の多忙さと効率性優先への抵抗感』『⑦職場におけるメンタルケアの必要性』の5つのカテゴリーと26のコードが含まれている。

〈チームワークがよく働きやすいと感じる〉な

ど、いずれの対象者も同僚とのチームワークが大切に連携や相談しながら働いている様子が伺えた。また、〈知識不足を感じ先輩に聞きながら業務をこなす〉〈プリセプターが業務や精神面を支える〉など、医療現場では新人を教育する体制が整っていることが分かった。

〈働き盛りの看護職が施設で働くことはまずない〉のように、福祉現場で働く看護職は『③あえて医療現場ではなく福祉施設を選択』していた。その理由としては、福祉現場で看護職をしたいという思いは少なく、〈勤務時間に魅力を感じ福祉施設を選択〉したり〈ブランクを考え病院より福祉施設という軽い気持ち〉であった。

福祉現場では全職員に対する介護職の割合に対して看護職の割合は少なく、〈介護職に気を使う〉ことが分かった。また、〈介護職の知識や技術に一目おいている〉との認識がある一方で、福祉現場で働く多くの対象者が〈介護職のケアや医療的知識不足に不満〉を感じていることも分かった。しかし、〈少ない人数なので介護職の気づきに助けられる〉や、看護助手経験者からは〈介護の専門性を認め看護職として協力すべき〉との思いもあった。

表3 【看護の道を選択し選ぶ】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No.	コード	語りのあった対象者
看護の道を選択し学ぶ	①看護職を目指したきっかけ	1	同僚や家族の勧めがあり准看護学校へ入った	A, <u>B</u> , E, <u>L</u>
		2	経済面を考え働きながら学べる准看護学校へ入った	<u>G</u> , <u>J</u>
		3	介護は医療行為ができないので看護職を目指した	A, <u>D</u> , E
		4	看護助手を経験してから准看護学校へ入った	<u>D</u> , I
		5	安定した職業である看護職を目指す	<u>F</u> , H
	②准看護学校での学びと精神的支え	6	実習は大変だが理想の看護を考える	E, <u>F</u> , <u>J</u> , <u>K</u>
		7	社会人の特権を活かして学ぶ	<u>D</u> , H, I
		8	周囲の人に支えられ准看護学校時代を過ごした	A, <u>D</u> , E, I

注：語りのあった対象者は表3の右端にA～Lで示した。表1で左端に示した対象者に対応したアルファベットA～Lである。下線を入れたアルファベットは、対象者の所属先が福祉現場（介護老人保健施設、介護老人福祉施設、障害者支援施設）であることを示す（以下の表4～7にも同様に示す）。

表4 【職場環境に沿った働き方をする】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No.	コード	語りのあった対象者
職場環境に沿った働き方をする	③あえて医療現場ではなく福祉施設を選択	9	勤務時間に魅力を感じ福祉施設を選択	<u>J</u> , <u>K</u>
		10	ブランクを考え病院より福祉施設という軽い気持ち	<u>G</u> , <u>L</u>
		11	利用者とかかわりながら仕事ができる福祉施設を選択	<u>F</u>
		12	働き盛りの看護職が施設で働くことはまずない	C, <u>D</u> , <u>J</u>
	④同僚と支えあい働きやすい職場環境	13	チームワークがよく働きやすいと感じる	A, E, <u>K</u> , <u>L</u>
		14	職場の人間関係が悪いと働きにくい	A, C, <u>F</u>
		15	後輩職員をサポートする	<u>B</u> , <u>L</u>
		16	職員間の関係が良好で安心して働ける	A, I, <u>L</u>
		17	多職種間の関係がよく働きやすい風土	<u>L</u>
		18	知識不足を感じ先輩に聞きながら業務をこなす	A, C, <u>D</u> , H, I
		19	プリセプターが業務や精神面を支えている	C, I
		20	所属先の教育体制に満足している	E, <u>L</u>
	⑤介護職の専門性を認めるも微妙な関係	21	所属先の理念と考え方が一致	A, <u>L</u>
		22	介護職に気を使う	<u>F</u> , <u>G</u> , <u>K</u>
		23	若い介護職と育った環境の違いに困惑	<u>G</u> , <u>L</u>
		24	介護職との連携では伝わるようにことばを選ぶ	<u>J</u>
		25	少ない人数なので介護職の気づきに助けられる	<u>D</u> , <u>L</u>
		26	介護職の知識や技術等に一目おいている	A, <u>F</u> , <u>J</u> , <u>L</u>
		27	介護職のケアや医療的知識不足に不満	A, <u>B</u> , E, <u>G</u> , <u>J</u> , <u>K</u> , <u>L</u>
		28	介護の専門性を認め看護職として協力するべき	A, E, <u>F</u>
	⑥医療現場の多忙さと効率性優先への抵抗感	29	介護職に准看護師資格取得を勧める	<u>G</u>
30		やりがいや看護観をもって働く余裕がない忙しさ	A, C, <u>G</u> , H	
⑦職場におけるメンタルケアの必要性	31	患者の抑制に対する認識の違いに戸惑う	C	
	32	同僚の共感的な言動にやすらぎを感じる	<u>K</u> , <u>L</u>	
	33	メンタルヘルスを学び同僚に活用したい	<u>L</u>	
	34	ストレスは多いが冷静になれるように意識している	I	

医療現場と同じく〈後輩職員をサポートする〉〈多職種間の関係がよく働きやすい風土〉のように、職場でのチームワークの重要性を意識していることが分かった。さらに、〈同僚の共感的な言動に安らぎを感じる〉のように、介護職からの共感的な態度に安らぎを感じていることが明らかになった。

(3) 【看護の仕事に必要な能力を考える】(表5)
この局面には『⑧命を預けられている看護の仕事の責任』『⑨知識不足や責任の重さを感じる』『⑩福祉施設の看護職は高い判断力が求められる』の3つのカテゴリーと17のコードが含まれている。

看護の仕事は、〈自分で判断しないとイケない

表5 【看護の仕事に必要な能力を考える】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No.	コ ー ド	語りのあった対象者
看護の仕事に必要な能力を考える	⑧命を預けられている看護の仕事の責任	35	自分で判断しないといけない責任感	A, <u>K</u>
		36	仕事は好きだが死と向き合うことに不安	I
		37	助手のときと比較し対象者を観察し考え行動	C, <u>F</u> , H, I
		38	看護職は介護職と違って医療的判断や処置が可能	A, I
		39	医療面での責任は看護職にある	A, <u>J</u>
		40	看護の仕事は思っていたより深い	A, H, I, <u>J</u>
	⑨知識不足や責任の重さを感じる	41	准看護師は看護師と仕事内容に差はなく責任が重い	A, E
		42	施設では准看護師と看護師の区別はない	<u>J</u> , <u>L</u>
		43	看護師との給料の違いは知識の違いと割り切る	<u>K</u>
		44	看護師と比較し劣等感を感じる	C, <u>L</u>
		45	学校で学んだ基本に返り自己を省みる	A, <u>F</u> , I
	⑩福祉施設の看護職は高い判断能力が求められる	46	福祉施設の看護職に求められる医療的判断は負担	<u>F</u> , <u>J</u> , <u>K</u>
		47	施設の看護職に求められるのは経験	<u>F</u> , <u>G</u> , <u>K</u> , <u>L</u>
		48	同僚に助けられながらも求められる内容に戸惑う	<u>F</u> , <u>L</u>
		49	1人で判断しなければならず責任は重い	<u>J</u> , <u>L</u>
		50	障害者施設の看護職はさまざまな能力が必要	<u>B</u>
		51	障害者施設での勤務に戸惑いがあった	<u>J</u> , <u>K</u>

責任感)や〈医療面での責任は看護職にある〉〈看護の仕事は思っていたより深い〉など『⑧命を預けられている看護の仕事の責任』を感じていた。そのため、〈学校で学んだ基本に返り自己を省み〉ながらも、〈准看護師は看護師と仕事内容に差はなく責任が重い〉〈施設では准看護師と看護師の区別はない〉〈看護師と比較し劣等感を感じる〉など、『⑨知識不足や責任の重さを感じ』ていることが分かった。

また、〈福祉施設の看護職に求められる医療的判断は負担〉〈1人で判断しなければならず責任は重い〉〈同僚に助けられながらも求められる内容に戸惑う〉のように、『⑩福祉施設の看護職は高い能力が求められる』ことが分かり、福祉現場の対象者全員からコードが挙げられた。

(4) 【看護の仕事に向き合う姿勢とやりがい】(表6)

この局面には『⑪社会人経験や人生経験を看護に活かす』『⑫利用者・患者主体のケアを意識』『⑬仕事のやりがいや満足感』『⑭福祉施設で働くことはメリットがある』『⑮福祉施設での看護職の立場を意識』の5つのカテゴリーと22のコードが含まれている。

対象者は看護以外の仕事を経験している者が多く、また、看護助手から准看護師になった者もいるためか、『⑪社会人経験や人生経験を看護に活かす』という意見が多くあった。

また、〈利用者・患者とかわる時間を大切にしている〉〈利用者・患者の尊厳を大切にしたい〉のように、『⑫利用者・患者主体のケアを意識』し働いていることが分かった。そのことが影響してか、〈利用者・患者の言動にやりがいを感じる〉

〈利用者の生活の中に自分の存在があると感じる〉との思いや〈給与面で満足している〉〈同僚から頼られるとやりがいを感じる〉など、利用者・患者だけでなく職場の同僚との関係や経済面で『⑬仕事のやりがいや満足感』を感じていた。

福祉現場の対象者は、〈福祉施設で働くことは人生にとってメリット〉〈施設で働き人の思いに寄り添うことの大切さに気づいた〉など〈病院で働くことでは得られない気づきがあった〉、『⑭福祉施設で働くことはメリットがある』との認識が明らかになった。そのような思いの中で、〈求められる仕事に対して情報が得にくい環境〉を感じ

ながら、〈福祉施設での看護職は介護職のサポート〉〈医療面で介護職だけでなく家族にも頼られる〉という環境の中で、〈他職種の専門性を信頼し〉『⑮福祉施設での看護職の立場を意識』し、仕事をしていることが分かった。

(5) 【看護職としてのキャリア】(表7)

この局面には、『⑯働きながら必要な知識を学ぶことは基本』『⑰看護職は経験をつむことが重要』『⑱看護師資格のことは念頭にある』の3つのカテゴリーと10のコードが含まれている。

対象者は『⑯働きながら必要な知識を学ぶこと

表6 【看護の仕事に向き合う姿勢とやりがい】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No.	コード	語りのあった対象者
看護の仕事に向かう姿勢とやりがい	⑪社会人経験や人生経験を看護に活かす	52	自身の人生経験や社会人経験を活かす	E, <u>G</u> , H, I
		53	看護助手の経験を看護に活かす	A, C, H
		54	若い頃より高齢者を受け入れることができる	<u>G</u>
	⑫利用者・患者主体のケアを意識	55	利用者・患者や家族の目線で思いに寄り添いたい	E, <u>J</u>
		56	利用者・患者とかかわる時間を大切にしている	<u>B</u> , C, <u>F</u> , <u>K</u>
		57	利用者・患者に思いやりをもって接したい	<u>D</u> , I, <u>K</u>
		58	利用者・患者の尊厳を大切にしたい	C, <u>F</u> , <u>L</u>
	⑬仕事のやりがいや満足感	59	給与面で満足している	I
		60	利用者・患者の言動にやりがいを感じる	I, <u>K</u>
		61	同僚から頼られるとやりがいを感じる	<u>F</u>
		62	先輩と看護論を語りやりがいを感じる	C
		63	できなかった手技ができたときの満足感	C
		64	利用者の生活の中に自分の存在があると感じる	<u>J</u>
	⑭福祉施設で働くことはメリットがある	65	福祉施設で働くことは人生にとってメリット	<u>G</u> , <u>J</u>
		66	施設で働き人の思いに寄り添うことの大切さに気づいた	<u>J</u> , <u>L</u>
67		病院で働くことでは得られない気づきがあった	<u>J</u> , <u>L</u>	
⑮福祉施設での看護職の立場を意識	68	正しい看取りの情報を社会に発信したい	<u>L</u>	
	69	介護職や家族に聞きながら利用者の情報を得る	<u>J</u>	
	70	他職種の専門性を信頼している	<u>J</u> , <u>L</u>	
	71	福祉施設で看護職は介護職のサポート	<u>G</u> , <u>J</u>	
	72	医療面で介護職だけでなく家族にも頼られる	<u>J</u> , <u>L</u>	
	73	求められる仕事に対して情報が得にくい環境	<u>J</u> , <u>K</u>	

表7 【看護職としてのキャリア】に属するコードとカテゴリー

局面	カテゴリー	No.	コード	語りのあった対象者
看護職としてのキャリア	⑯働きながら必要な知識を学ぶことは基本	74	基本の確認や新しい情報を得るため日々勉強する	G, H, J, K
		75	利用者や家族のニーズに対応できるように知識を得たい	J
		76	介護職の質問に答えられるよう知識を得たい	E
		77	所属先で対応するために必要な知識は取り入れたい	E, H
	⑰看護職は経験をつむことが重要	78	急変時の対応が難しく慣れない	C
		79	夜勤や病棟勤務をして経験をつみたい	E
		80	学校で学ぶのは基本で応用は現場でしか学べない	C, E, H, I
	⑱看護師資格のことは念頭にある	81	看護師資格を取り専門性を高めたい	A, C, I
		82	同僚が看護師資格取得を勧める	C, E, H
83		看護学校への進学は断念	A, D, K	

は基本』との認識から、〈基本の確認や新しい情報を得るため日々勉強する〉、〈所属先で対応するために必要な知識は取り入れたい〉と分かっていることが分かった。一方、〈急変時の対応が難しく慣れない〉〈学校で学ぶのは基本で応用は現場でしか学べない〉と感じており、『⑰看護職は経験をつむことが重要』との認識が明らかとなった。このカテゴリーは、医療現場の対象者からのみ得られた。また、〈看護師資格を取り専門性を高めたい〉〈同僚が看護師資格取得を勧める〉〈看護学校への進学は断念〉のように、准看護師から看護師へステップアップについて『⑱看護師資格のことは念頭にある』ことが明らかとなった。このカテゴリーに含まれるコードは、医療現場の対象者全員から得られた。

このように【看護職としてのキャリア】に含まれるデータは医療現場の対象者から得られたものが多く、この局面に含まれるコードのうち、福祉現場の対象者から得られたのは〈基本の確認や新しい情報を得るため日々勉強する〉〈利用者や家族のニーズに対応できるように知識を得たい〉〈看護学校への進学は断念〉の3つであった。

V 考察

1. 看護に対する意識

看護職以外の仕事を経験後、准看護学校へ入学した理由として、収入や自立の手段という経済的側面や介護職ではできない医療行為を行うためであり、准看護学校で学ぶ学生（以下、准看護学生という）への調査結果（田中・宮上 2015, 宮上・田中 2016）と同様であった。一方で、福祉・医療現場で働く准看護師は、『⑪社会人経験や人生経験を看護に活かし』仕事を行っていた。これは、看護を学ぶことについて、過去の経験で獲得した知識とは別の新しい体系の知識や技術の習得と考えていた准看護学生の調査結果（田中・宮上 2015, 宮上・田中 2016）と比較すると変化が見られ、准看護師として働く上では、学校で学んだ看護の知識だけでなく、社会人経験や人生経験等を活用し働いていることが明らかになった。

実際に働く中で、〈看護職は介護職と違って医療的判断や処置が可能〉〈医療面での責任は看護職にある〉〈看護の仕事は思っていたより深い〉と感じ、准看護学生時代以上に『⑧命を預けられている看護の仕事の責任』の重さを感じていた。

さらに、〈准看護師は看護師と仕事内容に差はなく責任が重い〉〈施設では准看護師と看護師の区別はない〉など、知識不足や責任の重さを感じていた。これは、福祉・医療現場と対象者の所属先に関係なく、共通の認識であった。それらを解決するために、『④同僚と支えあい働きやすい職場環境』を意識し、『⑪社会人経験や人生経験を活か』したり『⑯働きながら学ぶことは基本』と考え〈基本の確認や新しい情報を得るため日々勉強する〉など、職場環境や仕事に必要な能力を考え看護の仕事に向き合っていた。

また、看護助手を経験後、看護を目指した対象者の約半数が『⑥医療現場の多忙さと効率性優先への抵抗感』を感じていた。准看護学生への調査結果(宮上・田中 2016)でも、患者の思いに寄り添えてない医療現場の忙しさを実感していたことがわかった。これらのことは、利用者・患者にゆっくりとかかわりたいと思っているが、医療現場の多忙さと効率優先が影響し、学生時代から抱えていた課題が解消されず、その気持ちを変わず持ち続けていると考えられる。

2. 福祉・医療現場における准看護師の立場

『⑫利用者・患者主体のケアを意識』し、それぞれの職場で准看護師として対象者のケアにあたっていることが分かった。医療現場の准看護師は、〈知識不足を感じ先輩に聞きながら業務をこなす〉〈看護職は介護職と違って医療的判断や処置が可能〉〈できなかった手技ができたときの満足感〉〈所属先で対応するために必要な知識は取り入れたい〉など、患者のケアに必要な知識や技術に関係することが多く語られており、その点が特徴として挙げられる。准看護学生への調査結果(田中・宮上 2015, 宮上・田中 2016)でも、看護師としての知識や技術を確実に身につけたうえで業務をこなすことが重要など、看護師としての立場から患者に向き合うとの思いが明らかになり、類似した結果であった。

医療現場では医療的判断は医師が行い、その指

示の元、看護職により患者の療養が行われる。しかし、福祉現場では常勤の医師がいないことや、看護職の医療職としての専門性、対象者から得られた『⑩福祉施設の看護職は高い判断能力が求められる』とのデータから、福祉現場での医療的判断は看護職にゆだねられ、それらを解決・対応しなければならない環境が明らかになった。そのため、医療現場から福祉現場へ職場を変えた准看護師は〈障害者施設での勤務に戸惑いがあった〉り、〈福祉施設の看護職に求められる医療的判断は負担〉など、医療的判断を行うことに対して戸惑いや負担を感じていることが分かった。

また、福祉現場では、利用者や家族、介護職、リハビリ関係職、栄養士など、さまざまな専門職や家族が利用者を支え、チームで連携しながら働く必要がある。そのため、福祉現場の准看護師も『⑭福祉施設での看護職の立場を意識』し働いている様子が伺えた。〈他職種専門性を信頼し〉〈医療面で介護職だけでなく家族にも頼られる〉〈同僚から頼られるとやりがいを感じる〉〈利用者や家族のニーズに対応できるように知識を得たい〉など、利用者を中心とした他職種との関係の中での看護職の立場を意識し、介護職を中心としたチームの中で医療面を支えることが看護職の行う仕事と認識していることが明らかとなった。例えば、家族とかかわる中で、〈正しい看取りの情報を社会に発信したい〉と考えるようになったことは、福祉施設で働く看護職の特徴といえる。

3. 現場教育と看護職としてのキャリア

〈知識不足を感じ先輩に聞きながら業務をこなす〉〈プリセプターが業務や精神面を支えている〉〈所属先の教育体制に満足している〉など、医療現場では新人などの教育体制が整っていることが分かった。しかし、福祉現場では、〈求められる仕事に対して情報が得にくい環境〉など、自らが意識していなければ学ぶ体制にない環境であると考えられる。

看護職としての経験について、〈学校で学ぶの

は基本で応用は現場でしか学べない) など、『⑰看護職は経験をつむことが重要』であるとの認識が示され、医療現場の対象者ほぼ全員からデータが得られた。また、今後の自身のキャリアとして、〈看護師資格を取り専門性を高めたい〉〈同僚が看護師資格取得を勧める〉など『⑱看護師資格のことは念頭にある』ことが分かり、このカテゴリーには医療現場の対象者全員からデータが得られた。これらのことから、医療現場の准看護師は、看護職としての経験を積み、さらに看護師資格取得を目指すというキャリアを描いていることが明らかになった。

一方で、『⑰看護職は経験を積むことが重要』『⑱看護師資格のことは念頭にある』について、〈看護学校への進学は断念〉が2人のデータから得られたが、その他に福祉現場の准看護師から得られたデータはなかった。これは、医療現場の准看護師とは異なるキャリアを描いていると考えられる。また、看護職として〈基本の確認や新しい情報を得るため日々勉強する〉〈利用者や家族のニーズに対応できるように知識を得たい〉など、看護職として必要な知識を得ることに意欲を示していたが、看護師資格取得への志向は低かった。

VI 研究の限界と今後の課題

本研究は、四国内における福祉・医療現場の准看護師に対する調査であり、地域が限定的であった。また、所属先入職後5～9ヶ月の対象者がおり、経験から得られる看護の仕事に対する気持ちの変化などの語りが不足していることが考えられる。

これらの課題について検討するために、継続的な調査を行うとともに、福祉現場においては障害者支援施設と高齢者施設での比較など、さらに分析が必要であると考えられる。

なお、本研究はJSPS 科研費 26381139の助成を受けて実施した調査の一部である。

文献

- 狩谷恭子・黒田美知子 (2008) 「病院に勤務する准看護師の看護師養成所2年課程(通信制)進学の希望の有無とその影響要因」『日本看護学会論文集 看護総合』39, pp84-86.
- 公益社団法人日本医師会 (2008) 『平成20年度医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査』(http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20081001_1.pdf. 2016.9.18)
- 公益社団法人日本医師会 (2012) 『平成23年度医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査』(http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20120328_8.pdf. 2016.9.18)
- 公益社団法人日本医師会 (2013) 『平成25年度医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査』(http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20130807_21.pdf. 2016.9.18)
- 公益社団法人日本医師会 (2015) 『平成27年度医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査』(http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20150729_4.pdf. 2016.9.18.)
- 公益社団法人日本看護協会 (2015) 『未来に向かって～いきいきと働き続けるために～』(<http://www.nurse.or.jp/nursing/jyunkangoshi/pdf/sassi.pdf>. 2016.9.17)
- 公益社団法人日本看護協会 (2016) 『2016年度看護師学校養成所2年過程(通信制)進学者に対する奨学金募集要項』(http://www.nurse.or.jp/nursing/education/scholarship/ninenkatei/pdf/yoko_2016_01.pdf. 2016.9.17)
- 公益社団法人日本看護協会出版会編集 (2016) 『平成27年看護関係統計資料集-I 就業状況1 就業者数(4)看護師, 准看護師(年次別・就業場所別)』(<http://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei01-2016.pdf>. 2016.9.17)
- 河野由佳 (2014) 「准看護師教育の技術項目と卒業時の習得状況の実態調査」『看護教育研究抄録. 教員・教育担当者養成課程』40, pp32-39.
- 厚生労働省 (2014a) 「第1回社会保障審議会福祉

- 部会福祉人材確保専門委員会資料2『介護人材の確保について』(http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000062879.pdf, 2016.9.17)
- 厚生労働省 (2014b) 「第4回福祉人材確保対策検討会 (H26.7.25) 参考資料2『介護福祉士資格の取得方法について (第3回検討会資料について追加・修正)』」 <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokus-hougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000052555.pdf>, 2016.9.18.)
- 厚生労働省 (2015) 「社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会平成27年2月25日資料『2025年に向けた介護人材の確保～量と質の好循環の確立に向けて～』」 (http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000075800_1.pdf, 2016.8.8)
- 厚生労働省 (2016) 『保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する奨励の交付について』 (http://www.nurse.or.jp/nursing/jyunkangoshi/pdf/0822_5.pdf, 2016.9.18)
- 厚生省 (1996) 「准看護婦問題調査検討会報告の概要」 (<http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s1220-1.html>, 2016.9.17)
- 松永美千代 「多くの准看護師が働く地域から見た准看教育の現状と課題」 『看護教育』 53, pp48-51.
- 宮上多加子 (2012) 「離職者を対象とした介護福祉士養成教育における社会人学生の認識-学びの経験に関する個別面接調査に基づく分析-」 『介護福祉教育』 17 (2), 98-106.
- 宮上多加子・河内康文 (2012) 「離職者を対象とした介護福祉士養成事業における社会人学生の経験-離職者訓練生と介護雇用プログラム生の比較-」 『中国・四国社会福祉研究』 1, 22-32.
- 宮上多加子・田中眞希 (2013) 「介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス-離職者訓練生と介護雇用プログラム生の学年による変化」 『中国・四国社会福祉研究』 2, 13-29.
- 宮上多加子・田中眞希 (2014) 「離職者を対象とした介護福祉士養成事業修了生の介護に対する認識と仕事の信念」 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』 63, 153-163.
- 宮上多加子・田中眞希 (2015) 「介護雇用プログラム生の学びと仕事に対する思い-面接調査による3年間の変化の分析-」 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』 64, 1-16.
- 宮上多加子, 田中眞希 (2016) 『准看護学校における社会人学生の仕事に対する思い-介護職経験者の学習プロセスの分析から-』 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』 65, pp1-12.
- 中島幸江・佐藤禮子 (2008) 「看護師養成2年課程通信制で学ぶ准看護師の仕事と学びを両立させるための学習環境に関する研究」 『日本看護学会論文集 看護管理』 39, pp93-95.
- 野村陽子 (2014) 「看護の政策過程-准看護師問題を中心に-」 『法学志林』 111 (4), pp65-115.
- 逢坂範子 (2008) 「通信課程で学ぶ准看護師への支援策-既存の制度活用に着目した援助」 『看護部マネジメント』 13, pp17-21.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』 新曜社.
- 白井富久子 (2009) 「業務経験の長い准看護師が体験する倫理的問題」 『看護教育研究収録 教員養成課程』 35, pp1-7.
- 高橋恵子 (2010) 「准看護師のキャリアについての認識-准看護師と看護師長の視点から」 『看護教育研究抄録』 36, pp230-237.
- 田中眞希, 宮上多加子 (2015) 「准看護学校で学ぶ社会人学生の学習や仕事に関する認識と職業経験の影響」 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』 64, pp61-72.
- 田中眞希・宮上多加子 (2015) 「准看護学校で学ぶ社会人の学習や仕事に関する認識と職業経験の影響」 『高知県立大学紀要社会福祉学部編』

64, 61-72.

渡瀬淳子・脇幸子・井上亮他（2014）「臨床の場と看護基礎教育の場が期待する新人准看護師の医療安全能力の相違」『日本看護協会論文集. 看護教育』44, pp165-168.

山崎朋子（2012）「准看護師の生活行動援助における認識：観察と報告および看護師との連携について」『看護教育研究抄録. 教員・教育担当者養成課程』38, pp23-28.

安田かづ子・狩谷恭子・黒田美知子他（2009）「看護教育レポート 准看護師の経験年数による職場における状況と進学意向」『看護展望』34, pp90-94.